

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第1集



1988年3月

出雲市教育委員会

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 1 集

1988年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市は、県下でも有数の埋蔵文化財密集地です。これらは、貴重な文化遺産として、活用するとともに、将来にわたって保存していかなければなりません。

しかし、その貴重な文化遺産も、大規模な開発の波によって、失われつつあるのが現状です。

発掘調査を実施し、報告書として刊行される埋蔵文化財のほかに、報告もなされないままになっているものも、少なからずあります。

このたび、それらの調査等をまとめて、出雲市埋蔵文化財調査報告書第1集として発刊する機会を得ましたことは、文化財保護行政を推進する者として、喜びにたえません。

本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆さまに、厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

出雲市教育委員会

教育長 石飛満

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、これまで実施した調査等、のうち、未報告のものの一部について、まとめたものである。
2. 本書の執筆・編集は、出雲市教育委員会が行なったが、一部については、島根県教育委員会文化課西尾克己、角田徳幸の両氏のほか、島根大学学生宮本正保、佐藤雄史の両君の協力を得た。
3. 神谷たら跡の熱残留磁気報告については、島根大学理学部伊藤晴明教授と時枝克安助教授から玉稿を賜わった。
4. 表紙のカラー写真は、大念寺古墳北側割落断面の土層転写作業風景である。

目　　次

1. 神谷たら跡	1
2. 上長浜貝塚	8
3. 蔿棚山・平林寺山古墳群	13
4. 今市大念寺古墳北側割落断面の土層転写	19
5. 山地古墳出土の碧玉	22

1. 神谷たら跡



図1 神谷たら跡位置図

神谷たら跡は、出雲平野の西南部、出雲市芦渡町に所在する。平野を臨む小丘陵に構築され、すぐ北の山麓には十間川が流れ、南にも小川がある。

神谷たら跡は、地元では古くから知られ、「神門村誌」（昭和31年刊）にも、「保知石には隠居の經營たる鑑^鐵があって……（中略）……。鑑跡は今も神谷入口左手小高い地に……（後略）。」と記載されている。このたび、同地が町内集会所の建設候補地になったため、地元から協議があったものである。そのため、貴重な文化財として、保存して戴くようにお



写真1 神谷たら跡近景（南から）

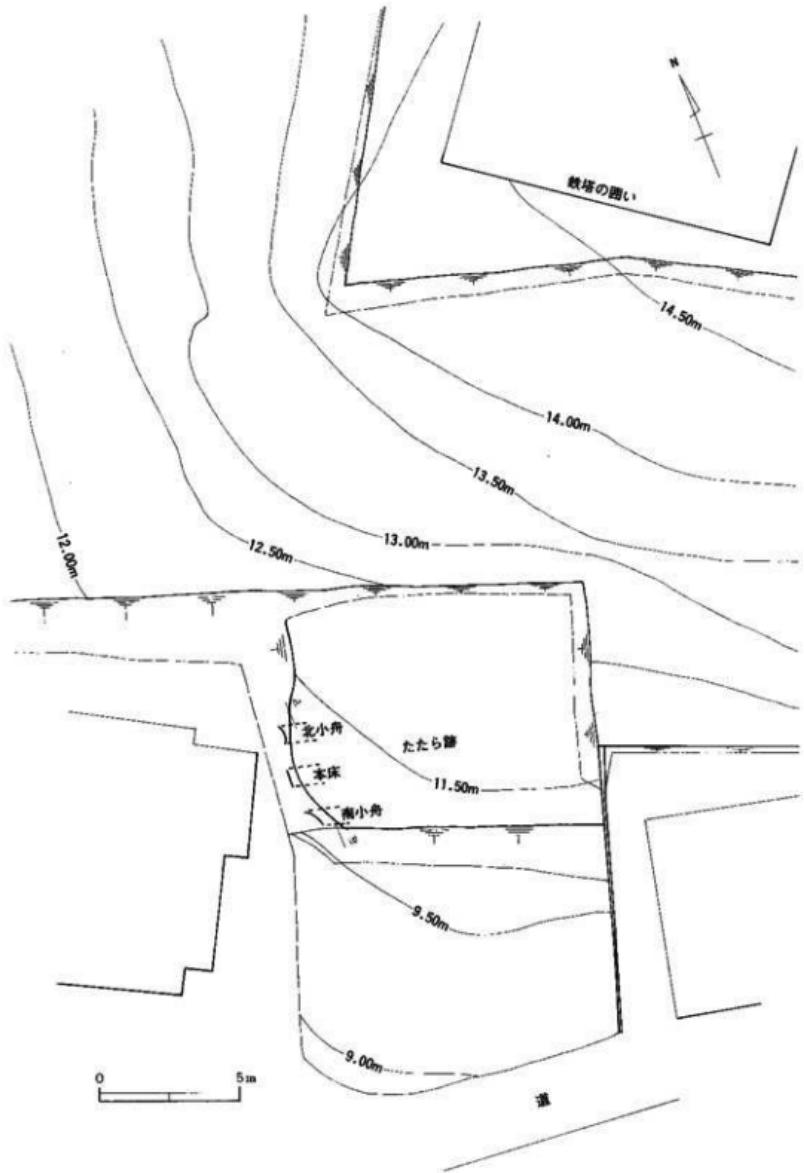


図2 神谷たら周辺地形測量図



写真2 神谷たたら跡遺構断面（中央は北小舟）

願いするとともに、要望の強かった西側崖面の断面調査を実施して、たたら跡の構造の概要を把握することにした。

調査は、昭和61年10月に、実施した。

神谷たたら跡は、大正10年頃、武田顯慶氏宅の宅地拡張に伴い、たたら跡の西側が削られたことによって、発見された。たたら跡のある場所は、現在、小村義太郎氏所有の畠地となっているが、西側は幅6m、高さ2mの崖となっており、そこに、たたら地下構造の断面が露呈している。

たたら跡の地下構造は、断面でみると、上部に幅5m位の掘り形があり、2m下位の本床釣りの最下端で幅4.5mを測り、山間部のたたらよりも、やや幅が広い。また、掘り方は、素掘りであり、石組は見当らない。床釣り部は、省略してあるようであるが、家屋がすぐ脇にあり、掘り下げて調査することができなかつたので、断定はできない。

本床釣り部構造は、近世高殿たたらの特徴である、中央にある本床と、その両脇に築かれた小舟によって構成されている。

本床は、上部幅1.1m、底幅0.8m、深さ0.9mの大きさに、粘土によって匁字状の囲いを作り、熱効率を高める工夫がなされている。内部には、上がつまっていたが、炉壁片

や鉄澤もみられた。本床は、強く焼かれているため、床面で10cm、両壁面で40cmの厚さに、粘土が焼結して砂岩のように固くなっている。

小舟は、本床の両脇に、北小舟と南小舟があり、本床の床面よりも小舟の床面が50cm低い位置にある。北小舟は、炉床の中心から1m北に内壁を築いており、小舟幅は0.8mで、高さは、中央部で0.8mある。両壁面は、2~3段に石垣状に石を積み上げて構築し、間隙は粘土を充填している。甲は、15cmの厚さに焼結して砂岩のように白く固まっており、内面には、乾燥させるために床を焼くときに薪をくるんだ蕭の痕跡が窺える。南小舟は、本床を中心として北小舟と等距離の位置で南側にある。北小舟にくらべて、やや小さく、幅、高さとも、0.7mである。構造的には、北小舟と同じである。小舟の平面プランは、現状からは判断しにくいが、奥行は、崖面から5m近くはあるようである。

神谷たたらの地下構造は、構造的にみると、近世たたらでも後半期のものといわれ、熱残留磁気測定結果（本書後掲）でも、それが裏付けられている。

なお、調査にあたっては、島根県文化財保護指導委員の杉原清一氏にご指導を賜わったほか、島根大学理学部の伊藤晴明教授と時枝克安助教授には、試料の採取、分析でお世話になりました。記して謝意を表します。

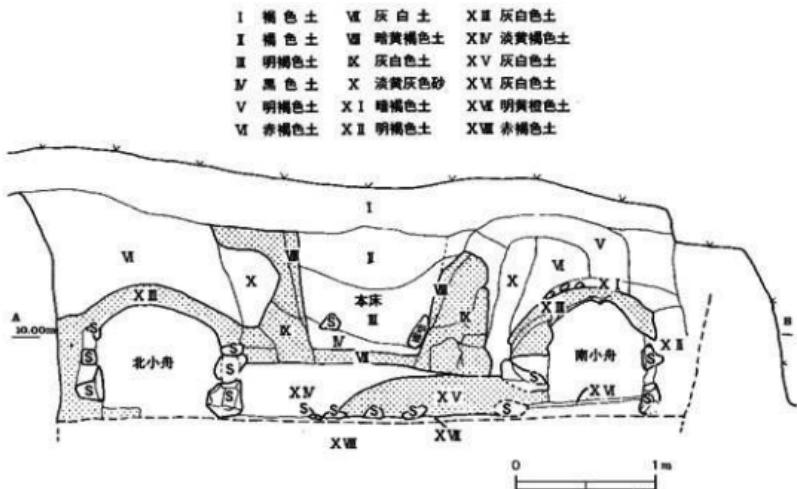


図3 西側セクション図

神谷たら跡の考古地磁気測定

島根大学理学部 伊藤晴明・時枝克安

1. はじめに

神谷たらは出雲市芦渡町神谷 ($35^{\circ}19'N$, $132^{\circ}44'E$) にあり、が型から江戸時代中期以降の築造と推定されるたらである。¹⁾

炉床は本床とその両側に小舟を有する本格的な近世のたら製鉄跡である。露出する断面で見る限り、本床北側の壁や床面はかたく焼きしめられ暗黄褐色に変色していたが、南側の壁は欠落し、色・形状共に不明であった。小舟は本床をはさんで南北に配置されていたが、両側の壁は内側を粘土、外側を石で構築しており、天井は粘土を打ちかためてあった。

断面で見る本床の大きさは床の幅が約80cm、高さが約70cmである。加熱によりかたく焼きしめられている天井の焼土は傘形をなし、きれいに残っていた。焼結粘土の厚さは傘形の中心部で約10cm、端に統くところで約30cm位であった。小舟は左右ほぼ同型であったが、大きさは少し異なり、焼結粘土の風化の度合も大分異なっていた。

2. 試料採取

考古地磁気試料として採取可能な焼土は本床およびその両側にある小舟の壁や天井に限定されていたが、北側の小舟は焼土部分の風化が進み脆くなっていたので、試料を採取しなかった。南側小舟天井部分はかたく焼きしめられ、考古地磁気試料として最適と思われたので、南側小舟天井から18個、本床北側の焼結粘土壁から5個、本床床面から6個、計29個の試料を採取した。南側小舟天井では、乾燥作業による加熱・冷却後、天井部が変形していないかをチェックするため、傘形状焼土面のほぼ全面から試料を採取した。

3. 自然残留磁気 (NRM) の測定

試料のNRM方向はすべて無定位磁力計で測定した。測定したNRM方向は図1に示す通りである。小舟天井からのNRMはほぼ同じ方向を示し、バラツキもそれ程大きくない ($\theta_{\text{av}}=3.0$)。しかし、本床北側の壁と床面からのNRMは互いにその方向を異にし、小舟天井からの方向とも異なることが、図4から読み取れる。本床壁からのNRM方向は比較的浅い伏角を示し、床面からのそれはより深い伏角を示している。

本床の壁と床面の粘土は同一時期に加熱され焼結したものと考え得るので、獲得した両者のNRM方向は同じでなければならないが、測定の結果は両者が異なることを示した。この結果は、次の二つの理由のうち、どちらかで説明できると思われる。一つは、加熱時本床内に鉄塊が存在し、その二次磁場で地磁気の方向が変化し、壁と床の焼土は異なった

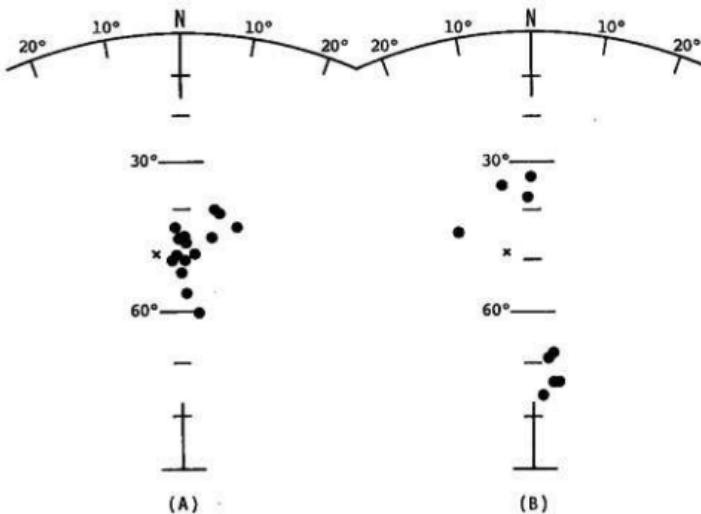


図4 NRMの方向 (A)小舟天井 (B)本床の床と壁

磁化方向を獲得したとする考え方である。しかし、このような可能性は非常に稀だと思われる。もう一つの考えは、炉廃絶後本床の壁と床が相対的に動いているとする考え方である。測定結果を説明するには、壁が伏角を浅くする方向に、床面は深くなる方向に傾いたとすればよい。炉床断面で見る限りでは、本床の壁と床面が炉廃絶後動いたとするのがもっとも妥当なように思われる。

上述した測定結果から、本床のNRM方向は炉床構築時の地磁気の真の方向を表わしていないと結論される。従って、本床のNRM方向は年代推定データから除外した。一方、小舟天井からのNRM方向は、場所による違いもみられず、バラツキも比較的小さいので、この炉床の年代推定に使用できると考えられる。小舟天井から得たNRM測定結果は次の通りである。

測定試料数 $N=15$

平均偏角 $D=2.7^\circ$

平均伏角 $I=47.7^\circ$

信頼度係数 $K=158.9$

誤差角 $\theta_e=3.0^\circ$

4. 推定年代

図5は小舟天井の試料から得られた平均NRM方向 ($D=2.7^\circ$, $I=47.7^\circ$) の値を広岡²による西南日本の地磁気永年変化曲線にプロットしたものである。図2において、測定値から近接する曲線に垂線を下すことにより、次の3つの年代値が読み取れる。

A D1780±30年、A D1380±20年、A D420±20年

しかし、神谷たたらの炉床は炉型からみると近世の構造であり、中世以前の炉とは考えられない。従って、神谷たたらの考古地磁気年代は A D1780±30年であると結論される。

註

- 1) 杉原清一、たたら炉床構造の推移について、「たたら研究」、27号、14~25、1985。
- 2) 伊藤晴明、たたら製鉄遺跡の考古地磁気学的研究、「山陰地域研究」(伝統文化)、2号、1~11、1986。
- 3) 広岡公夫、考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、「第四紀研究」、15卷、200~203、1977。

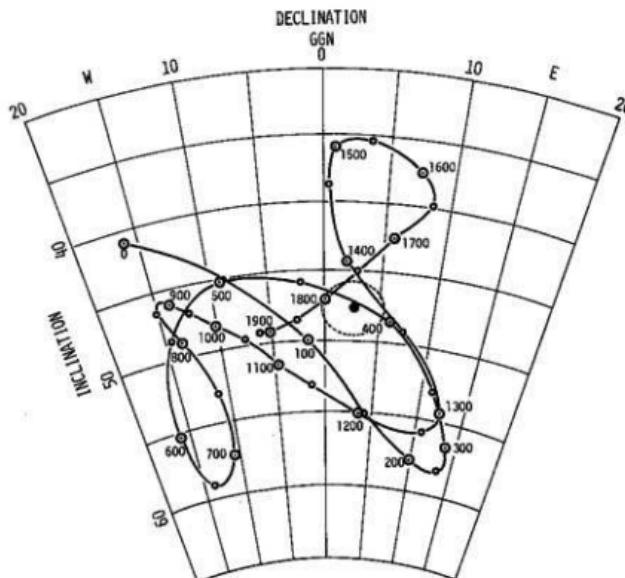


図5 西南日本の地磁気永年変化図とNRM方向の平均値（黒丸）

2. 上長浜貝塚



図6 上長浜貝塚位置図

発見に至る経緯

上長浜貝塚は、出雲平野の西端にある出雲砂丘地の一帯にある。長浜神社の北方約1kmの出雲市西園町3,667-22に所在し、神戸川の左岸堤防から西へ約400m入ったところにある。付近一帯は採砂地になっており、もとの地形は、北に向かった緩やかな傾斜地であったが、現在は大きく抉られ、平坦な畑地として土地利用されている。

昭和58年6月に、㈲一幸石材から砂利採取計画許可申請書が提出されたことに伴って、現地を調査したところ、片隅に積み上げられ



写真3 上長浜貝塚遠景（中央の採砂地）

ていた廃土の中から、多量の貝類や土器片などが発見されたため、廃土中の調査を実施したものである。

調査の概要

遺跡は砂丘の裏側にあり、新砂丘によって深く埋もれている。東には、神戸川を隔てた向こう側に、美田が広がっている。

遺物が含まれる層は、「クロスナ層」と呼ばれる黒褐色のやや砂質な土層であり、廃土中には多く含まれている。クロスナ層は、西側の砂丘断面によると、北西から南東に向かって砂丘の斜面を下っており、平坦な畠地では、地表下 0.5m 付近に認められている。また、廃土の一角には、部分的に残存している地点もあり、クロスナ層の層厚は 0.3m である。このうち、遺物が認められるのは、斜面をのぞくクロスナ層中からであり、当時の地形を推定すると、砂丘裏側の斜面下の凹地であったことが考えられる。

一般的に、クロスナ層は、汀線が海側へ後退したときに、飛砂が少なくなったために形成されたものといわれている。もし、それによれば、弥生時代後期から中世にかけては、比較的現在よりも寒く、砂丘の生成が休止した時期とみることができる。このことは、大社町原山遺跡にもいえる。原山遺跡は、弥生時代よりも古くから生活が営まれた砂丘上の遺跡であるが、昭和60年の調査では、クロスナ層を黒色粗砂層として表記しており、0.2 ~ 0.4m の層厚で、東に向かって下がっていく様子が観察されている。遺物は、弥生時代から中世に至る幅広い時期を示しているが、上長浜貝塚とは遺跡が営なされた時期がほぼ符合している。

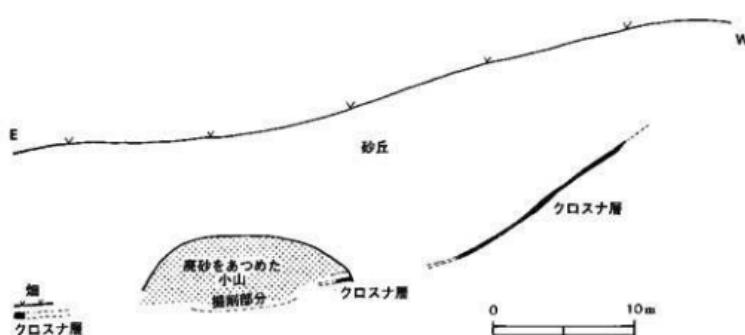


図7 上長浜貝塚クロスナ層略測図

また、出土遺物のうち、貝類についてみてみると、ヤマトシジミが大半を占めるが、なかには岩礁性のサザエの殻も混在している。これは、どうみても、大社から日御碕にかけての磯へ行かなければ手に入れることはできない。しかし、貝類の殆んどを占めるヤマトシジミは、容易に得ることができたと考えられる。

奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によると、上長浜貝塚の東に広がる水田地帯は、当時は「神門水海」と呼ばれた潟湖が広がっていたことが記載されている。「神門水海」は、おそらく現在の神戸川よりも少し西まで広がっていたと思われる所以、上長浜貝塚は砂丘背後で風のあまり当たらぬ、東の眼前に穏やかな潟湖がある好条件の居住占地をしていたことが指摘できる。

出土遺物

本貝塚からは、少量の土器と土製品および、ヤマトシジミを中心とする多量の貝類が発見されている。

貝類としては、2~4cm大のヤマトシジミが大部分を占めるが、マガキ、サザエ、アカガイと思われるものが数個体分混じる。

土器には、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器が、土製品としては土錐がある。

弥生土器としては、弥生時代後期前半と後期後半の甕が各1片ある。甕(図8-1)は、口径11.4cmで、口縁部は内傾しつつ立ち上がり、外面には3条の凹線がある。調整は、内外面の多くがヨコナデで、頸部外面はナデ、内面はヘラ削りが施されている。胎土中には細砂が多く含まれ、焼成はよく、淡褐色を呈する。甕(図8-2)は、口径21.6cmで、口縁部は外反しつつ立ち上がる。文様としては、貝殻腹縁による平行沈線文と刺突文が、口縁部と頸部外面に施されている。調整は、頸部外面と口縁部内面がヨコナデ、頸部内面がヘラ削りである。胎土中には細砂が多く含まれ、焼成はよく、灰褐色を呈する。

土師器は、数片が認められるが、器形を知ることができるものは古墳時代前期の低脚壺(図8-3)のみであり、口径は20.0cm、深さは2.8cmを測る。壺部のみ残存し、脚部を欠く。壺部は浅く、口縁部にかけて緩く広がる。調整については、内面がヨコナデ、外面がヘラミガキである。胎土は密で、焼成はよく、淡褐色を呈する。

須恵器は数十片出土しているが、器形を知ることができる蓋(図8-4)と壺(図8-5~8)は、すべて奈良時代に属する。これらの胎土は密で、焼成はよく、多くは青灰色を呈する。蓋(図8-4)は、口径13.9cm、肩部までの器高は1.4cmを測る。肩部外面はヘラ切りが施されたため平らたく、肩部から口縁部にかけては強く屈曲する。壺(図8-5)は、口径10.5cm、器高は3.6cmを測る。体部は斜め方向に開き、底部はヘラ削りを施

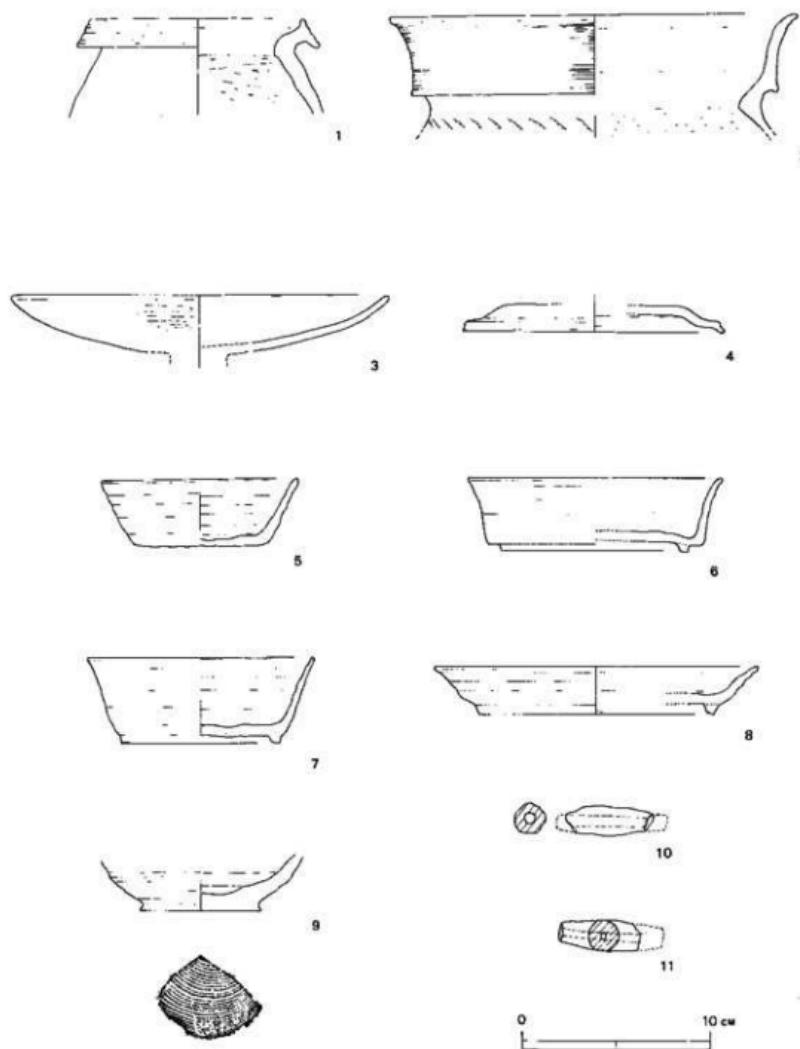


図8 上長浜貝塚出土遺物実測図

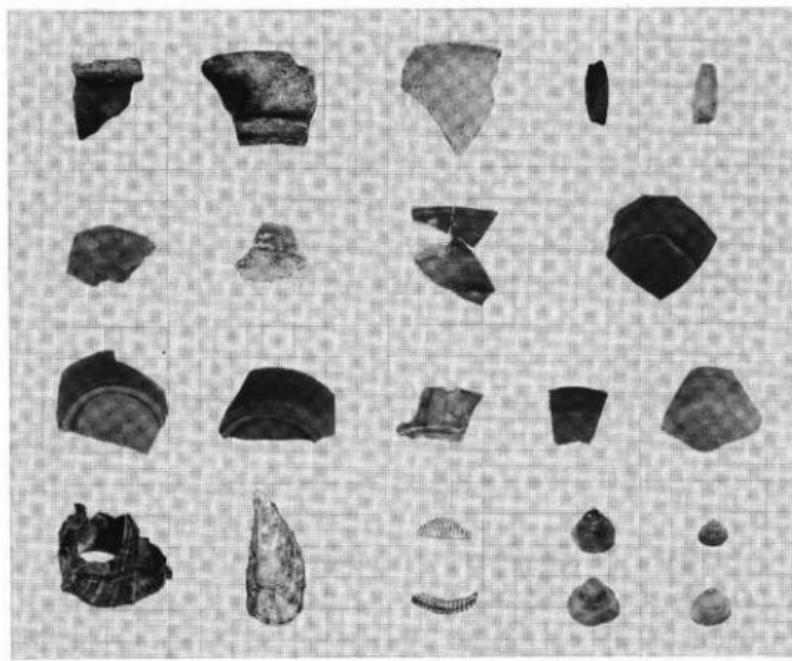


写真4 上長浜貝塚出土遺物

す。壺(図8-6)は、口径13.5cm、器高4.0cmを測り、体部には径10.0cm、高さ0.4cmの低い高台が付く。体部はやや外反する。壺(図8-7)は、口径12.2cm、器高4.6cmを測る。体部は外開き気味に立ち上がる。底部には径8.6cm、高さ0.4cmの低い高台が付く。壺(図8-8)は、口径17.2cm、器高2.6cmを測る。体部は大きく外反し、底部には径12.5cm、高さ0.5cmの低い高台が付く。

土師質土器としては、中世に属するものが2個体出土している。壺(図8-9)は、底径6.5cmで、口縁部を欠く。底部から体部にかけては器肉が厚く、内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切りで、体部はヨコナデである。胎土は密で、焼成は良く、色調は淡褐色を呈する。

土錘としては、円柱状のものが2個出土している。表面には、成形時の凹凸が残る。胎土中には微細砂が含まれ、焼成は良く、褐色を呈する。土錘(図8-10)は、径1.5cmで、現在長は4.3cmである。また、土錘(図8-11)は、径1.6cmで、現在長は4.7cmを測る。

註(1) 大社町教育委員会『出雲・原山遺跡発掘調査概報』(1986)

3. 謐棚山・平林寺山古墳群

位置と環境

謐棚山古墳群、平林寺山古墳群は、出雲市東林木町にあり、市内では最も北に位置している。北山山塊の南麓にあり、大谷川と畠谷川が合流した湯屋谷川の右岸の低丘陵上に古墳が点在している。地形からみて、湯屋谷川の隆起扇状地とみられ、まわりよりもかなり低い丘陵が、舌状に南に伸びている。この丘陵からの眺望はすばらしく、中国山地から出雲平野に流下する斐伊川が、南方正面に見える。

出雲市内における遺跡の分布は、南山山麓と、沖積平野の旧自然堤防上に偏り、北山山麓で知られるものは、非常に少ない。しかし、その殆んどは、この付近に存在している。湯屋谷川の東にある大寺谷には、東の尾根上に、県内最古の前方後円墳である大寺古墳があるほか、すぐ南のチップ工場付近は、大寺三藏遺跡であり、また、万福寺には重要文化財の仏像が数多く収蔵されている。古墳群の南には、古前後横穴群などがあり、付近には消滅した古墳も数多いと伝えられている。

古墳群の概要

これまで、これらの古墳群については、『出雲市誌』（昭和26年刊）に謐棚山古墳として、僅かに紹介がなされているものの、地元でも知らない人も多かったが、鳴尾史談会会長、原重夫氏をはじめとする方々の精力的な踏査によって、古墳群の輪郭がほぼ明らかになってきた。



図9 謐棚山・平林寺山古墳群位置図

低丘陵上には、現存する古墳が13基確認されている。しかし、明治から大正年間の開墾によって消滅した古墳もかなりあったと伝えられているので、本来は20基以上はあったと考えられる。丘陵のほぼ中央から北が平林寺山で、南を謐棚山と地元では呼んでいたので、それに従うと、謐棚山古墳群が5基、平林寺山古墳群が8基で構成されることになる。

謐棚山古墳群は、現在5基が確認されている。1号墳がその中核と考えられ、市内最大の方墳である。内部主体は、3号墳に箱式石棺が知られているほかは、不明である。墳丘

の規模も、小さいものが多い。都我利神社のある東の尾根上と、いまは荒地となっている西の尾根上には、古墳を発見できなかったが、開墾前には存在したと考えられる。

平林寺山古墳群は、8基が確認されている。いずれも小規模の古墳であり、内部主体も、第3号墳が横穴式石室、第6・7号墳が箱式石棺であるほかは、よくわかっていない。遺物についても、8号墳から玉類と須恵器が出土したほか、5号墳で直刀と須恵器が出土したと伝えられるに過ぎない。

古墳各説

膳棚山1号墳 両古墳群中で、最大規模を誇る方墳である。墳丘は整正された方形を呈し、墳丘の崩壊した古墳が多いなかにあって、残存状態が最も良い。内部主体は不明である。付近には、五輪塔などがある。

膳棚山2号墳 1号墳のすぐ北に、同じレベルで隣接する方墳である。北と西に、墳裾を窺わせる傾斜変換線があり、本来は、1号墳と同規模の方墳であった可能性もある。なお、2号墳の東には、奥壁と考えられる石があるほか、東斜面からは、須恵器の破片が出土しているので、古墳があった可能性もある。

膳棚山3号墳 2号墳の北にある古墳で、復元径8mの円墳と考えられる。墳丘は東

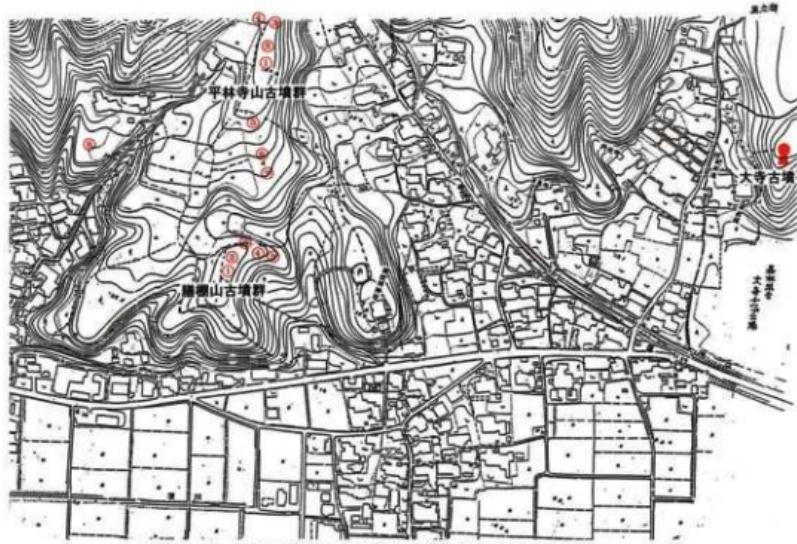


図10 膳棚山・平林寺山古墳群分布図

1. 講棚山古墳群

墳丘番号	墳形	規模	内部構造	出土遺物	備考
1	方墳	21×20m			山内最大の方墳、南方崖下に横穴がある。
2	方墳	一辺10m			1号墳と同じレベルで接している。墳丘が損われている。
3	円墳(?)	復元径8m	箱式石棺 (0.5×1.5m以上)		墳丘の東半分を失っている。
4	円墳(?)				
5	円墳(?)	径10m以上			東へ伸びる尾根の突端部に築成。

2. 平林寺山古墳群

墳丘番号	墳形	規模	内部構造	出土遺物	備考
1	方墳	一辺18m			西側に平坦面がある。周囲に大石がある。南西コーナーの石は掘り取られている。
2			横穴式石室(?)		墳丘は崩れている。犬井石と側壁らしい石がある。
3			横穴式石室		南に開口する片袖式の石室で、露出している。
4	円(?)	径11m			墳頂部に炭焼がまの跡と伝えられる凹地がある。
5				高刀、須恵器	大石がある。
6			箱式石棺 (0.5×1.5m)		昭和初期、箱式石棺の蓋をとったら、人骨があったと古者が伝えている。
7			箱式石棺 (0.7×2m)		水田にするために開墾したときに、発見された。
8	円(?)			管玉2、勾玉1、須恵器	主体部不明

側が崩落しているが、その断面に箱式石棺が露呈している。遺物は、発見されていない。

講棚山4号墳 3号墳とほぼ同規模の円墳と考えられるが、詳細は不明である。

講棚山5号墳 4号墳の東にあり、東に伸びる小尾根上の突端に位置する。3号墳より墳丘がやや大きい古墳である。なお、この古墳の東南、少し低いところに主体部が陥没した古墳らしきものがある。

平林寺山1号墳 古墳群では、最大規模の古墳である。墳丘の高さは、あまりない。四方のコーナー付近に大きな石があるが、意味をもつものかどうかは、不明である。（南西コーナーには、石がとられたあと穴がある）

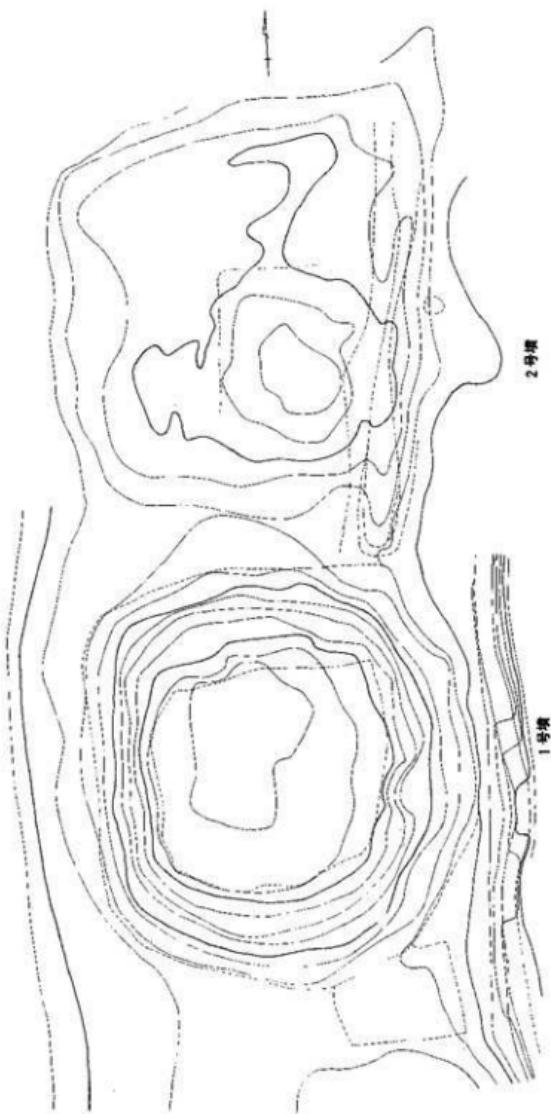


图11 麒麟山古墓群（1号堆、2号堆）填正测量图



写真5 古墳群遠景

平林寺山2号墳 1号墳の北にある古墳で、崩れているため墳形は不明である。天井石、側壁と考えられる石があり、そうであれば、西北に開口する横穴式石室となる。

平林寺山3号墳 2号墳の北に位置し、小型の横穴式石室が露呈している。石室は南に開口する片袖式で、奥壁を欠いている。付近に天井石が2枚あるが、いくらかは持ち去られたと伝えられている。

平林寺山4号墳 3号墳のすぐ西にある、径11mの円墳と考えられる。内部主体は不明だが、主体部付近が陥没し、かつて、ここで炭焼きをやっていたと伝えられている。この古墳の西側の畑地や南の水田からは、須恵器片が多量に採取されており、4号墳の西側にも古墳があった可能性が強い。

平林寺山5号墳 丘陵斜面に大きな石があり、かつて、直刀、須恵器が出土したというが、遺物の所在は不明である。

平林寺山6号墳 墓丘は、開墾によって消失しているが、箱式石棺が残されている。昭和初期には、蓋をとると人骨があったと古老が伝えている。現在は、埋戻されている。

平林寺山7号墳 6号墳と同じく、箱式石棺を内部主体とする古墳である。墓丘は、消失している。

平林寺山 8号墳 最西端にあり、円墳と考えられる。中島勇氏宅前にあり、碧玉製の管玉2、勾玉1のほか、須恵器が出土している。なお、かつて、東側の道路をつけるときに、古墳が2基発見され、須恵器が出土したという。

まとめ

勝棚山古墳群、平林寺山古墳群は、市内では、馬木町に所在する刈山古墳群とならぶ貴重な古墳群を形成している。各古墳は、小規模墳ではあるが、古墳群中に方墳を含み、内部主体に箱式石棺が多いと考えられる点は、この古墳群の特色である。また、広瀬消滅古墳をはじめとする、東林木町で知られる古墳からは、少なからず玉類の副葬があり、この地域の古墳の特異性と考えられる。

本稿を成すにあたって、鳩巣史談会会长の原重夫氏からは、多大の協力を得ました。記して謝意を表します。



写真6 勝棚山1号墳

4. 今市大念寺古墳北側割落断面の土層転写



図12 今市大念寺古墳位置図

今市大念寺古墳は、近年の保存修理事業に伴う発掘調査によって、高度な土木技術を駆使して築造された古墳であることが明らかになりました。全国的な話題となつたことは記憶に新しい。昭和61年度においても、保存修理事業に伴う北側割落断面の発掘調査によって、前方部と後円部の築成過程を知るうえでの貴重な知見が得られています。保存修理工事では、この断面を埋めてしまうので、二度と見ることはできなくなる。そのため、北側割落断面のうち、特に貴重な成果を提供した東側の約30m²の土層面を剥ぎ取り、そのままの状態を保存することにした。



写真7 土層転写作業風景

今回は、奈良国立文化財研究所の土層転写技術研修を、島根県では初めて修得した、島根県教育文化財団の柳浦俊一氏を指導者として迎え、昭和61年7月に実施した。

作業手順は、次の通りである。

- ① 土層転写面を綺麗にする。とくに、細かな木の根を切っておくと良い。
- ② トマック液と硬化剤を1:1の割合で、混ぜ合わせ、よくかきませる。
- ③ 土層転写面に、硬化剤を混ぜたトマック液をハケで塗る。塗るときは、ムラのないようにする。
- ④ 塗った上に、切ったガーゼを重ねる。
- ⑤ ガーゼの上から、もう一度、トマック液を塗り付ける。
- ⑥ 塗った面が乾いたのち、剥ぎ取る大きさにあわせて線を引き、図面上での位置を明らかにしておく。
- ⑦ 切り出しナイフなどで、線にそって切り口を入れる。
- ⑧ 転写面は、かなりの重きがあるので、数人で補助をしながら、少しずつ剥ぎ取っていく。
- ⑨ 剥ぎ取った土層面から、ブラシなどを使って、余分な土を落としておく。
- ⑩ 水洗いをして、表面の汚れを落とす。
- ⑪ 表面が乾いたら、シンナーで薄めたサンコール液を、スプレーで吹き付ける。することによって、表面に艶がでて、色調がはっきりする。
- ⑫ 剥ぎ取った転写面は、日陰で保管する。夏は軟かく、冬は硬くなる特性があるので、上に重い物を置くと、冬には破損しやすい。人が歩かないように、特に冬期には注意

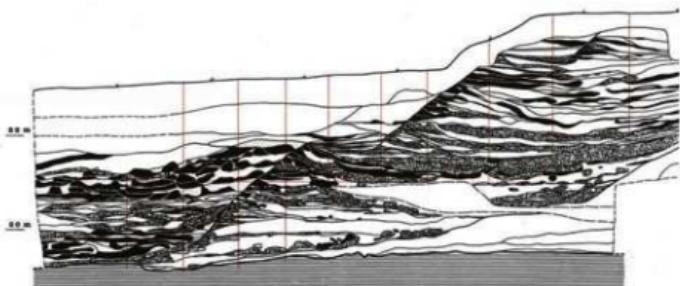


図13 大念寺古墳北側削落断面土層転写区分図

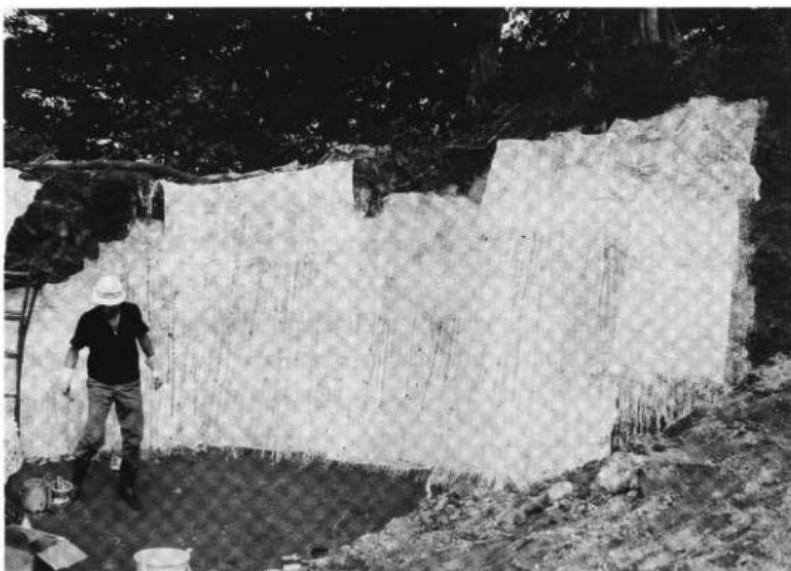


写真8 トマック剤塗布完了状態

する。

土層転写作業は、県内では本格的な実例がないうえに、土層転写面の面積が30m²と大きく、うまくできるかどうか不安ではあったが、幸い優秀な指導者にも恵まれ、無事に終えることができた。

土層転写作業で気付いた点はいくつかあるが、今後の参考のために述べると、第1に、転写する土層が乾いていることが必要条件となる。大念寺古墳の場合、保存修理工事の着手時期との関連で、最高の条件を選べなかつたため、乾燥状態が今一つであった。そのために、一部では剥ぎ取る厚さが薄かったり、部分的に欠落したところもある。時間が許せば、よく乾燥した状態での作業が望ましい。

また、転写面は、軟かい土よりも、堅く締まった土層のほうが、転写しやすい。大念寺古墳の場合、版築状瓦層は、割合剥ぎ取りやすかったが、表土などの軟かい黒褐色土は、トマック液が付着しにくかった。

さらに、トマック液に硬化剤を混ぜると、はやく固まるので、作業は手早く処理しなければならないし、固まってしまえば、溶かすことは容易ではないので、作業服、靴などに付着しないように注意することが必要である。

5. 山地古墳の碧玉



図14 山地古墳位置図

山地古墳は、採土工事の事前調査によって、昭和59年6月に発見された。昭和60年春の発掘調査で、県内で初めて筒形銅器が発見され、一躍有名になった古墳である。また、三つの埋葬主体をもつ前期末の古墳としても、注目されている。

『山地古墳発掘調査報告書』は、昭和61年3月に、既に発刊しているが、ここで述べる碧玉については、報告書に、「径1cm程度の円礫」として報告するに留まっていた。しかし、報告書刊行後、国立奈良文化財研究所での調査研究の過程で、単なる円礫ではなく、碧玉であることが明らかになつたので、ここ



写真9 山地古墳（西から）

に追記しておきたい。

碧玉は、第1埋葬主体に副葬された筒形銅器（写真の右側）の内部に入っていたが、長さ2.7cm、最大径1.4cmの小さな紡錘状のもので、濃緑色を呈し、光沢がある。原石の表面を研磨しているが、形状からみて、未製品とは思われない。

筒形銅器には、内部に小棒や管玉などが入っていることがよくあることから、響音を出す呪術的な用途が推定されている。

山地古墳出土の筒形銅器に、目釘穴があることからみても、内部に碧玉を収納した状態で、木柄などを装着し、塞いでいたことが考えられる。

筒形銅器内には、必ずしも管玉のような完成品を納める必要がなかったことは、山地古墳の例からも窺うことができる。そうすると、筒形銅器内に収納するものは、形が限定されたものではなく、むしろ、その碧色という色彩が尊ばれたのではなかろうか。詳しく検討していないので、これ以上はいえないが、筒形銅器と収納物に、共通する色が選ばれることは、偶然とは言いがたい。古来、碧色は、生命力の源といわれ、珍重されてきた色であること、係わりがあるかも知れない。

山地古墳からは、第2埋葬主体に、別の筒形銅器（写真の左側）が副葬されていた。かなり変形し、底部を欠いている。この内部や、付近からは、碧玉などは全く確認できなかった。

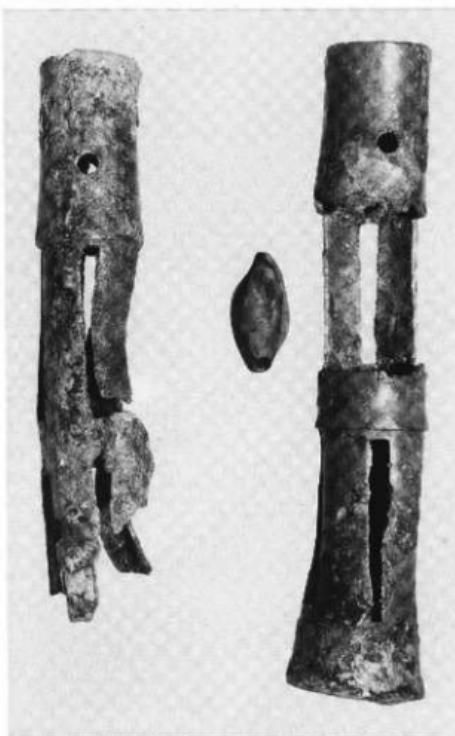


写真10 筒形銅器と碧玉（八雲立つ風土記の丘資料館提供）

昭和63年3月25日 印刷
昭和63年3月30日 発行

出雲市埋蔵文化財調査報告書
第1集

発行 出雲市教育委員会
印刷 伊藤印刷